

Contents

02

サステナビリティレポート2025について

03

編集方針

04

ヤクルトの企業概要

05

ヤクルトの事業展開

06

トップコミットメント

09

ヤクルトのはじまり

11

ヤクルトのサステナビリティ

27

環境活動報告

28

環境マネジメント

35

気候変動の緩和と適応

46

持続可能なプラスチック容器包装の推進

51

持続可能な水資源管理

54

生物多様性の保全

57

廃棄物・食品ロスの削減

59

社会活動報告

60

安全・安心な製品と情報の提供

65

地域社会との共生

70

強靱で持続可能なサプライチェーンの構築

78

地域に根差した健康の普及

80

多様な健康ニーズに応える健康価値の創出

84

従事者の健康・安全・安心

91

ヤクルトレディに対する取り組み

92

新しい価値を提供できるインベーティブな人材の育成

95

従事者の多様性の尊重

99

人権

106

顧客満足

109

ガバナンス報告

109

コーポレートガバナンス

116

リスクマネジメント

118

コンプライアンス

121

第三者意見

122

外部からの評価

123

ESGデータ集

マテリアリティ

持続可能な水資源管理

水リスク調査の実施

持続可能な水使用のためには、各工場が位置する河川流域における水需給の見通し、水災害発生の可能性、公衆衛生、生態系への影響等の水リスクについて認識する必要があると考え、2017年から外部機関による調査を実施しています。

2020年からヤクルトグループの生産拠点における水ストレスレベルの高い地域を特定するために、WRI Aqueduct等を用いて水リスクを評価しています。

2024年度の評価結果は、水ストレスの高いエリアに位置する生産拠点*数は全体の21%であり、該当エリアにおける取水量は2,928,444m³、総取水量に対する割合は48.5%でした。

2023年度以降、水リスク評価結果および事業規模や市場成長性等を踏まえ工場を選定し、現地での詳細調査を実施しています。

2024年度は、2023年度に実施した富士裾野工場を除く本社乳製品工場4工場での詳細調査を実施しました。また、海外においてはメキシコのイスタパルカ工場およびマレーシアのセレンバン工場で詳細調査を実施しました。いずれの拠点においても顕在化しているリスクは見られなかったものの、将来の水リスク低減のため、水使用量の削減や排水基準遵守の追加策に加え、評判リスクへの対応として現地ステークホルダーへの各事業所の取り組みのさらなる周知が必要であることを認識しました。

※ WRI AqueductによるBaseline Water Stressが「極めて高い」または「高い」に位置する生産拠点

水リスクの高い国 (Aqueduct Water Risk Atlas)

①バーレーン ②キプロス ③クウェート ④レバノン ⑤オマーン ⑥カタール ⑦アラブ首長国連邦 (UAE) ⑧サウジアラビア ⑨イスラエル ⑩エジプト ⑪リビア ⑫イエメン ⑬ボツワナ ⑭イラン ⑮ヨルダン ⑯チリ ⑰サンマリノ ⑱ベルギー ⑲ギリシャ ⑳チュニジア ㉑ナミビア ㉒南アフリカ共和国 ㉓イラク ㉔インド ㉕シリア (リスクが高い順に記載)

●:ヤクルトが販売活動を行っている国 ■:ヤクルトが生産・販売活動を行っている国

生産拠点におけるWRI Aqueduct 水リスク評価結果

リスク分類	現在※ ¹		将来(2080年)※ ²	
	国内拠点数	海外拠点数	国内拠点数	海外拠点数
極めて高い Extremely High (4-5)	0	8	0	7
高い High (3-4)	0	7	0	4
中庸～高い Medium - High (2-3)	4	6	6	4
低い～中庸 Low - Medium (1-2)	8	7	4	8
低い Low (0-1)	0	1	2	6
総計	12	29	12	29

※1 Baseline Water Stress (Total, Overall water risk)

※2 Future Projection Water Stress(2080, pessimistic)

サプライヤー拠点における水リスク調査結果(WRI Aqueduct: Future Projections/2040/Pessimistic)

リスク分類	サプライヤー拠点数	*サプライヤー拠点における水リスク調査は2020年度に実施
極めて高い Extremely High (4-5)	35	
高い High (3-4)	77	
中庸～高い Medium - High (2-3)	141	
低い～中庸 Low - Medium (1-2)	69	
低い Low (0-1)	35	
総計	357	

水リスク調査コスト

年度	2020	2021	2022	2023	2024
コスト(万円)	0	0	640	1,700	1,237

Contents

02 サステナビリティレポート2025について

03 編集方針

04 ヤクルトの企業概要

05 ヤクルトの事業展開

06 トップコミットメント

09 ヤクルトのはじまり

11 ヤクルトのサステナビリティ

27 環境活動報告

28 環境マネジメント

35 気候変動の緩和と適応

46 持続可能なプラスチック容器包装の推進

51 持続可能な水資源管理

54 生物多様性の保全

57 廃棄物・食品ロスの削減

59 社会活動報告

60 安全・安心な製品と情報の提供

65 地域社会との共生

70 強靱で持続可能なサプライチェーンの構築

78 地域に根差した健康の普及

80 多様な健康ニーズに応える健康価値の創出

84 従事者の健康・安全・安心

91 ヤクルトレディに対する取り組み

92 新しい価値を提供できるイノベティブな人材の育成

95 従事者の多様性の尊重

99 人権

106 顧客満足

109 ガバナンス報告

109 コーポレートガバナンス

116 リスクマネジメント

118 コンプライアンス

121 第三者意見

122 外部からの評価

123 ESGデータ集

■ 設備自動洗浄工程で使用する水の削減

工場では、製品の生産終了後に配管やタンク・殺菌機等生産機器を、洗剤を使用して自動洗浄しています。事前に汚れを落とすための前水洗、洗浄後の洗剤残りを防止するための後水洗があり、製品品質を保つためにとても重要な工程である一方、生産活動での水使用量の中で大きな割合を占めています。各工場では、十分な検証と品質管理を徹底したうえで前水洗・後水洗の水量を削減する取り組みを推進し、その結果、約2,131㎡の削減を実現しました。

WEB

海外生産拠点における水の定量データ(ESGデータ集)

https://www.yakult.co.jp/company/sustainability/download/

WEB

国内生産拠点における水の定量データ(ESGデータ集)

https://www.yakult.co.jp/company/sustainability/download/

水質汚濁予防と生物多様性の保全

本社乳製品工場およびボトリング会社では、生産の過程で発生する洗浄水等の排水を各工場に設置されている排水処理施設で地域ごとに定められた排水基準値を超えることがないように適正に処理した後、下水道や河川に放流しています。排水基準に関しては、懸濁物質の代表的な指標としてBOD(生物化学的酸素要求量)やpH等を確認しており、2024年度において重大な流出はありませんでした。河川等周辺の自然環境に与えるリスクを認識し、排水処理施設での不測の事態や工場敷地内の輸送車両から油類が漏れた場合等、想定される緊急時対応の教育訓練を年に1回以上実施して、水質汚濁予防に向けた体制強化や意識向上を図っています。

各工場の生産品種や能力が変更になる際は、生産設備の検討だけでなく、環境に与える影響を考慮し、排水処理能力に対する検討も行っています。近年では、茨城工場における、生産能力の増強等により排水処理施設への負荷が増加することに対し、処理能力を増強するための設備投資も行っています。

さらに、一般的な排水処理知識のほか、全国工場の担当者の知識・経験を技術資料としてまとめ、排水処理にかかわる従業員のスキルアップや管理技術の伝承教育に活用しています。

また、水辺における生物多様性の保全に努めています。IBAT*を使用した生態系リスク調査を行っており、茨城工場の近隣に位置する渡良瀬遊水地は、ラムサール湿地に指定されていること等を確認しています。

※ IBAT(Integrated Biodiversity Assessment Tool):国連環境計画(UNEP)等が参加する生物多様性プロジェクトIBAT Allianceが開発した生物多様性統合アセスメントツール。

関連情報

P.55 既存事業の生物多様性リスクの評価

各国・地域における取り組み

■ 生産排水の浄化施設の設置(中国ヤクルトグループ)

無錫工場では、中国の排水基準1級Aを満たす生産排水処理施設を設置しています。排水基準1級Aの水質は、工業用水としての再利用が認められており、無錫工場からの排水は最終水処理場を経由して、無錫工場内の緑地で散水に利用するとともに他社の工場でも活用されています。2024年度は144,361tの排水が再利用されました。また、生活污水の浄化装置も設置し、外部排出基準を満たしたうえで排水しています。

■ 工場における水使用量の削減(広州ヤクルト)

広州ヤクルトの3工場は、各種検証をもとに溶解・培養・調合の各段階におけるCIP洗浄での酸洗浄の頻度を見直しました。その結果、酸洗浄後のすすぎの水使用量の削減を実現しました。2024年度の3工場の水削減量は合計8,706tでした。

水の有効利用に関する各国・地域の主な取り組み

国・地域	活動内容
台湾	雨水リサイクルシステムを導入し、雨水をトイレの水洗や散水等に再利用
韓国	生産設備の自動洗浄の排水を再利用し、水の使用量を削減
フィリピン	エルサルバドル工場では雨水を回収してトイレの水洗や緑地散水に再利用
マレーシア	使用済み培養タンクを活用して排水処理水を工場緑地での散水等に再利用
ベトナム	工場緑地の散水を排水処理水に切り替え、乾期に400tの水使用量を削減
インド	工場の排水を処理後、工場緑地に散水。2024年は、月平均1,317t、年間合計15,807tを再利用
ブラジル	ロレーナ工場では水の再利用として排水処理水を多孔質フィルターで処理し、第三工場のトイレ水洗、敷地内緑地の散水等に再利用。2025年に水委員会を設置し、水使用量削減のプロジェクトを開始
メキシコ	イスタパルカ工場では、排水処理水を工場の緑地に散水。2024年は月平均1,454t、年間合計17,452tを再利用
アメリカ	本店・工場敷地内に雨水の再利用システムを設置し、雨水を植物の散水に再利用